

東日本大震災直後、俳句は何を問題にしたか

——「当事者性」とパラテキスト、そして御中虫『関揺れる』

加島 正浩

一、問題設定

震災直後の震災詠では「詠み手の立ち位置」が問題とされていた。たとえば、毎日俳壇選者の西村和子と芝不器男俳句新人賞選考委員などを務める対馬康子、「鷹俳句会」主催で毎日新聞俳壇選者なども務める小川軽舟の三人が二〇一一年を振り返る鼎談において、震災詠を以下のように議題化している。

西村 私たちが震災を詠む時に気をつけなければいけないのは、離れていても自分のことのように思っているんですよとか、他人事とは決して思っていないという気持ちを表す余裕が、俳句には悲しいことにはないんです。短歌だったら、自分は当事者ではないけれどすごく心を痛めているということとか、ちょっと

複雑なことまで言えると思うんだけど。俳句は短くて切ないなと思うのはそういうところです。他の人の句を選ぶ場合でも、当事者でもないのに「津波を被った卒業証書を受けた」と詠んであつても、これはテレビで見たことを俳句にしたのかなという疑いが湧いてきて採れなくなったり。その作者の住んでいる場所をつい確認したくなるような思いがしたのです。それはやはり俳句の短きゆえなんですよ。

対馬 では、その場所から離れていたら詠んではだめなのか、被災の当事者でなければだめなのかと言ったら、そうではないので、そこは難しい。映像で見たのを詠んだ句だとしても、その人にとつては心の底から出たことばなのでしょう。けれどもそれが他人事になってしまつては困りますね。

小川 結局、俳句では時事を詠むのは難しいというのと同じだと思ふんです。この地震を報道を通して時事として見て詠まれ

た句は表面的なんだと思います。でも、これだけ大きな、日本にとって危機的な状況は、被災地にいなくても、いわば日本人そのものの悲しみとして受け止めているわけですよ。だから、それはそれぞれの立っている位置で詠める俳句があると思います。^⑥

西村は、俳句はその短きゆえに震災を「自分のことのように思っている」という気持ちを表現することができないと述べ、選句の際にもその句が被災した「当事者」のものであるかどうかを確認したくなると思える。それを受け対馬は、他人事にならないことと条件づけをしながらも、被災した「当事者」に詠み手を限定できるわけではないことを示し、小川が議論を総括するように、東日本大震災を「日本人」の問題として捉える視点からであれば、だれもが「それぞれの立っている位置で詠める俳句がある」と主張する。

また「澤」同人の野崎海草も「震災後の俳句、ということを考えてとき、私は多くの疑問と違和感でいっぱいになる。被災していない「ひとごと」な立場の者が、被災者の視点(のつもり)で句を詠むことにはどうしても共感できない」^⑦と述べており、震災直後には、被災者のみが震災を詠めるという制限は好ましくないが、被災者以外が「被災」を詠むことには抵抗があり、震災時に自らがいた場所で自らが捉えた震災を「他人事」にならず詠むことが望ましいとされる状況があったとまず総括できるだろう。

本稿はまず、上記の引用で触れたように、詠み手が被災者であるか、あるいは被災地と縁がある人物であったか、被災地を訪れたことがあるかなどの詠み手の立ち位置や来歴が震災詠においては問

題視されたことを、同時代評を整理し詳らかにする。そのうえで、詠み手の来歴が震災を詠んだ句の評価に直結していることを、酷評にさらされた長谷川權『震災句集』や福島県須賀川氏在住の永瀬十悟の「ふくしま」五〇句などを分析することで明らかにする。そして最終的に、震災詠の議論に応答するように震災を詠んだ御中虫『閨揺れる』が、被災していない立場から被災者や震災へとながろうとする詠み方を示していたことを主張したい。

二、詠み手の立ち位置という問題

被災者でない者が震災を詠むことに制限を加えられていたわけではないが、それは震災を詠むことが安易であったことを示すわけではない。たとえば「群青」共同代表の權未知子は以下のように述べている。

被災者とは呼べず、かといって地震を経験しなかったわけでもない。東京の揺れや被害は東北地方に及ぶべくもないが、程度の差こそあれ、ともかくにも「揺れ」を経験したこと。そして、震災に伴うその後のいろいろな不自由さを実感したことが、被害の大きかった地域と一本の糸でつながっている意識を、首都圏の人々の中に育てたのではないだろうか。そしてそれがかえって、被害の少なかつた地域の俳句愛好者達に、震災を安直に詠むのをためらわせた原因になったのではないだろうか。／それはなぜか。「ちゃんと被害に遭っていない自分にはその資格がない」と思った人が思いのほか多かつたからではないか。自分

の経験した災害の範囲ならば作品にはできて、報道や伝聞をもとにして被災地を詠むことは躊躇してしまう。もちろん、作品にはいけないという決まりがあるわけではない。しかし、震災を半端に経験した者は、なぜか口ごもってしまうのである（口ごもってしまうはず、である）⁶⁾

權もまた「作品にはいけないという決まり」があるわけでもなく、「自分の経験した災害の範囲ならば作品にはでき」ることは示唆しているが、被災者ではないが地震の経験者ではある「半端」な立場に置かれた東京の人々は「ちゃんと被害に遭っていない自分には」詠む「資格がない」と捉えたのではないかと述べる。それは福島県いわき市出身の浜松鯨月が「今こうやって震災詠を求められて、『詠めるか』と聞かれてしまうと、私は詠めないです。震災詠を詠むこと、震災について何か言うことは、震災で何かを犠牲にした人だけに許されていることなのかな、と思ってしまうて」⁴⁾と述べていることにも共通する。震災の被害が広範であり、誰もが程度の差はあれ影響を受けたと捉えることが可能になるために、震災詠を可能にする経験は有するが、自分以上に被災の被害を受けた人の存在が、その経験を作品化することへのためらいを生じさせていることが指摘できる。

しかし、震災から時間が経つにつれ、詠む行為自体を倫理的に問うべきではなく、あくまでも作品の質を論じるべきとする意見もみられるようになる。たとえば、「豈」同人の高橋修宏は「戦争であっても、大震災であっても、作品化——つまり、その対象を詠む行為自体は倫理性の次元で問われるものでは決してないはずである。

その詠まれた作品が、いかなる表現の水準を、内質を、そして詩的リアリティを獲得しているかが、その全てではないだろうか」⁵⁾と詠まれた作品自体が全てであるという態度を明確に打ち出している。また長谷川權が『震災を体験した人じゃないと震災を詠んではいけない』という倫理的な意見が出てき「たことに触れたうえで、「こうした意見がどこから出てくるのか。振り返ってみると、明治の子規の「写生」の下に俳句が進んできた結果、こういう意見が出てくるのではないか。「写生」は西洋のリアリズム（現実主義）から生まれたのですが、それとは違って俳句の対象を見たもの聞いたものに限定する。そこから、自分で体験したことでもない句にはいけない倫理観が生まれる」⁶⁾と述べ、『メキシコ料理店』などの句集のある小野裕三が「震災後に『テレビ俳句』の是非がかなり議論になった（中略）少なからぬ人が『テレビ俳句』の正当性を疑ったが、そこでそもそも疑うべきはそれを疑う側の視点としての「写生」的価値観だったとしたらどうだろう。そこにある視線には、日清戦争をこの目で見ようと満州に赴いた子規の遺伝子が脈々と受け継がれているようにも思える」⁷⁾と述べるなど、子規以来の「写生」観が震災詠にも影を落とし、詠み手を被災者に限定することにつながり、テレビでの被災地の映像を見て詠む「テレビ俳句」を否定的に捉える空気を醸成したのではないかとという指摘もなされ、「写生」的価値を重んじる現実主義的な俳句観では、震災詠の幅を狭めることが示されている。

確かに「テレビ俳句」については、先に引いた西村和子のように否定的な意見を持つ俳人もいる一方で、そこに可能性を見出す意見も存在する。たとえば「小熊座」主宰の高野ムツ才は、金子兜

太の（津波のあとに老女生きてあり死なぬ）という句がテレビ画面を見ての俳句であることを示したうえで、「テレビの画面を見て俳句を作つてはいけなるとよく言われますが、そうと言えないことを、この句は示しています。つまり、向き合い方です。テレビの画面をどのように捉えるか。それにいかに自分の心情をぶつけ、言葉として発信するか。それによって、俳句として可能になるのだと思います」⁽⁸⁾と、テレビの映像との向き合い方によつては、名句が生まれることを示している。金子兜太に師事していた安西篤も同様に、被災地の光景を想像して詠む「震災想像俳句といえども想像力のあり方次第によつては、表現としての可能性を残されているともいえよう」⁽⁹⁾と述べており、被災の経験や被災地に訪れたか否かに左右されず、テレビの映像などを基に被災者や被災地を想像することとで名句が生まれる可能性を認める言説も存在している。若手俳人のトップランナーのひとりである神野紗希が「東北にいたくても震災の句を詠んでいいとは思っているし、逆に東北にいても良い句が詠めるとは限らないわけですね。東北にいる人で震災詠を詠んでいても、これじゃあここにいなくても作れるなっていう俳句は沢山あるわけじゃないですか」⁽¹⁰⁾と述べているように、震災詠においても句の質とその句を詠んだ場所とが必然的に結びつくわけではない。しかし神野は、以下のようにも述べている。

震災詠とカテゴライズするとき、私たちは何「を」詠むかに拘り、津波や原発といったモチーフを抽出しがちだ。しかし本当に大切なのは、どこ「で」詠むかではなかったか。それは被災地に住んでいるとか、東京にいたら震災を詠めないとか、そ

ういうことではない。福島には福島の、東京には東京の、震災を経た俳句がある。（中略）つまりは震災を経た私「が」詠むことを意味する。震災詠とは、自らの立ち位置を定め、その場所を自覚的に引き受けて詠む、作家としての態度の問題なのだ。⁽¹¹⁾

詠み手のいる場所が、震災を詠んだ句の質を定めるのではなく、詠み手のいる場所を読み手が自覚的に意識し、その場とそこにいる「私」が被つた「震災」の影響を詠めば、それは震災詠として成立することを神野は指摘している。ただし注意しなければならぬのは、「東京にいたら震災を詠めない」ということではないとしながら、「東京には東京の、震災を経た俳句がある」と神野がいうとき、それは東京にいながら、被災地や被災者を「想像」する俳句の可能性を高野や安西のように認めているわけではないということである。まとめれば、震災を詠むこと自体を倫理的に禁じることは、震災詠、ひいては俳句の可能性自体を狭めるため望ましくはないが、被災者ではなく、あるいは被災地にいることなく、被災者・被災地を詠むことには、「想像俳句」という可能性が示されながらも、難色が示されているといえるだろう。そしてその点を裏付けるように、厳しい批判にさらされたのが、長谷川権の『震災句集』であった。

三、長谷川権『震災句集』の是非

長谷川権は、一九五四年、熊本県に生まれ、俳句結社「古志」の前主催であり、現在はネット歳時記「きごさい」代表ならびに

東海大学芸創作学科特任教授である。また「朝日歌壇」の選者を務め、「読売新聞」に詩歌コラム「四季」を連載し、『俳句の宇宙』でサントリー学芸賞（一九九〇年）、句集『虚空』で読売文学賞（二〇〇三年）を受賞し、二〇〇八年には『長谷川権全句集』が刊行されるなど、現代俳壇の中心人物のひとりである。そして長谷川は、二〇一一年四月に短歌で『震災歌集』（中央公論新社）を刊行し、二〇一二年一月に俳句で『震災句集』（中央公論新社）を刊行するなど⁽¹³⁾、いち早く詩歌で震災に反応した俳人であった。しかし、その歌集・句集への評価は芳しいものとはいえない。たとえば関悦史は、以下のように述べる。

長谷川権はさらに矢継ぎ早に『震災歌集』を出し、『震災句集』を出した。これら（ことに前者）は俳人たちの困惑や痛罵に留まらず、歌人、詩人たちからも否定、冷笑を浴びた。俳人であるにも関わらず歌集が先に出たのは《かりそめに死者二万人などといふなけれ親あり子ありはらからあるを》といった作を見れば、単に興奮状態で出てくる特に思想的な深まりもない言説が俳句には収まらなかつたためであろうが、しかし、三十一文字に収まった激情の、何とどのかに見えることであろうか。⁽¹⁴⁾

また句集に関しても『燎原の野火かと思えば気仙沼』《生き残る人々長き夜を如何に》といった震災句の他人事ぶり」を批判し、別箇所でも「本人は被災地域に住んでいたわけではなく、その句は季語を中心とする俯瞰的な空想のイメージに心情を乗せたものであ

り、現実の混乱がおさまらない時期に（みちのくの山河慟哭初桜）といった句が発表されたことは、いささか奇異な印象を与えた」⁽¹⁵⁾と記している。

震災直後の被災者の生活が全く落ち着いていない時期に、被災地域の外側からのどこかで他人事の句を発表した長谷川の態度を批判しているのは、関のみではなく、「豈」同人の堀本吟も「権の俳句は芭蕉の「奥の細道」をなぞって様変わりした土地を旅しているかのような取り澄ましたところが嫌だ」⁽¹⁶⁾と述べており、権未知子も以下のような批判を行っている。

長谷川権は、『歌集』の時は被災直後だから仕方ないとはいえ、『句集』刊行の際には、どうだったかというところ、一度も現場に行っていない。作品の質だけを問うならば、別に行かなくとも構わない。現地に行こうが行くまいが、珠玉のような一句を生み出し得たならば、それはそれで成功したといえる。／＼しかし、結果として生み出された句は、《水漬く屍》のようにどこまでも古典に立脚した、そしてどこかしら空疎に見える立派な句であり、人の心を打たなかつた。（中略）高みから嘆いて貰うことを、被害に遭った地の人々は願っているわけではない。同情を望んでいるわけではない。⁽¹⁷⁾

権の「どこかしら空疎に見える立派な句」という表現からは、長谷川の句は、被災地とは無縁の次元で、自身の俳句をただ追求したものと捉えられ、批判されているとわかる。もちろん、「古志」・「草笛」同人の川村杏平のように「ダンテや芭蕉を引き合いにだ

して震災を詠った作家は、長谷川權たつた一人であろう。このように時空を超えた表出と、ごく当たり前の季語との取り合わせによって、俳句独自の文学性を放射している」⁽¹⁸⁾と長谷川の文学性の追求を評価するものもあるが⁽¹⁹⁾、長谷川の震災句がもつ立派な文学性が、むしろ混乱する被災地を踏まえたときには、「のどか」で「取り澄まし」、「高みから嘆いて」いるような「他人事」の句として受け止められたといえるだろう。混乱の続く震災直後に俳句として成立するように震災を詠んだことが、被災者と被災地の目線から震災詠を考える者には違和感を生じさせたといえる。

確かに長谷川の『震災句集』からは、被災地とは縁を持たない俳人の震災詠であることが容易に確認できる。たとえば〈療原の野火かとみれば気仙沼〉からは、気仙沼が燃え広がる様子の背後に、震災以前の燃える前の気仙沼の姿や燃えていく気仙沼への思いなどは読み取れず、〈春泥やここに町ありき家ありき〉もただそこに町や家があったことを想起しているのみで、泥にまみれた町や家の記憶や愛着などの感情を読みとることはできない。また津波によって泥にまみれてしまった町や家の様子を、一般的には凍解や雪解などで生じた泥を意味する「春泥」という春の季語で詠むことが適切であるかも疑わしい⁽²⁰⁾。また〈原子炉の赤く爛れて行く春ぞ〉、〈大地震春引き裂いてゆきにけり〉、〈原発の煙たなびく五月来る〉などの句には、地震と原発事故によりそれまでの生活が失われてしまった人々の姿はなく、地震と原発事故により、変容してしまつた春の姿が詠まれているにすぎない。その点は〈国難や一の頼みの柏餅〉、〈空豆や東京電力罪深し〉、〈この国を菖蒲の風呂で洗はばや〉、〈放射能などに負けるな初茄子〉などの句にも共通し、震災と原発事

故によつて、それ以前の季節とは姿を変えてしまつた様子が、季語と取り合わされることで示されはするも、その変容してしまつた日常を生きざるを得ない人々の姿をみることはできない。さらに「南相馬市の人」と但し書きをつけたうえで詠まれた〈逃れきて命涼しき女かな〉など、避難してきた女性が複雑に抱えているであろう心情に思いを及ぼせることがない句もあり、被災地のみならず被災者や避難者へも関心がなくなることがうかがわれる。長谷川の句は、震災後に変容してしまつた風景を詠んだものとして評価することも確かに可能であるかもしれないが、震災を「他人事」と捉えているという以上に、被災地・被災者に関心が向いておらず、その点では「無関心」と述べた方が適切なようにも思える。俳句としての精度はさておき、震災詠として酷評されるには十分な理由があつたといえるだろう。

四、詠み手の「情報」と句の評価

しかし、長谷川の震災詠への批判が、彼が詠んだ句のみを対象としてなされていたのかは検討する余地があると考ええる。関悦史は、福島県喜多方市出身の五十嵐進の俳句に触れ、以下のような指摘を行っている。

「現地」からの距離という作品外の情報に無意識に足場を置いた鑑賞には思わぬ落とし穴があるのではないか。〈放射線に色を！極彩色の故山かよ〉〈責任というやまとごころのありや神州〉といった五十嵐本人の句の激情と没入は、「現場」の俳

人であるがゆえに齟齬を来たすことはない。しかし一方、その「情報」を抜きにしての鑑賞が困難になるという問題を持つことにもなる。(中略)「現場」だけでは捉えきれないのが東日本大震災の特徴であり、その中で現場主義を貫く時、本文以外の付随テキストの情報はどう捌くかという、普段はやり過ごせている問題も特殊な形で噴き出すことになる。⁽²⁾

関が五十嵐の句自体を問題視しないのは、『現場』の俳人であるがゆえであり、その評価は詠み手の五十嵐が福島県喜多方市の俳人であるという「本文以外の付随テキストの情報」に基づいている。そのため、仮に原発事故の影響を被った地域に縁がある、あるいは事故を受け生活に苦心していると俳壇内でみなされていない人物の手により、五十嵐の句が詠まれていたとすれば、その句は詠み手の姿勢とともに批判の対象になりえた可能性を十分に持つ。現に長谷川の震災詠の批判には、関が「本人は被災地域に住んでいたわけではない」と記し、權も「一度も現場に行っていない」ことを書きつけている。詠まれた句のみが評価の対象になるのであれば、被災地を見知っていない事実を記す必要はなく、それが記されるということは、あからさまに句への評価にその「情報」を反映させないまでも、その情報がパラテキストとして評価に含みこまれていると判断するのが適切だと思われる。

そして詠み手の情報は、震災詠を批判する際のみならず、肯定的に評価される際にも影響を及ぼしている。福島県須賀川市出身・在住の俳人である永瀬十悟は⁽²⁾、二〇一一年に「ふくしま」五〇句で「第五七回角川俳句賞」を受賞しているが、選考の場で永瀬

の句を積極的に評価した正木ゆう子は〈避難大事恋も大事やチューリップ〉という永瀬の句について「その句の〈避難大事恋も大事〉つて、本当にそうですよ、中学生くらいの子にとつては。これを他所から行った人が詠んだら、のんきすぎるかもしれないけれど、この方はそうではないんじゃないかと感じました」と述べ、また「ふくしま」五〇句全体に対しても「私は福島で被災をした人の句と信じて読んでいます。そう思つて読むので、けつこう涙が出ました。

切羽詰まっていないとは思わなかったですね。(中略)これはそういう書き方ですもの。だから、それはウソであつてはいけないと、そういう意味です。私は埼玉県に住んでいますけれど震災のことを詠みますよ。それでいいわけ」⁽²³⁾と述べている。〈避難大事恋も大事〉ということを福島に住んでいない人が詠んだ場合は「のんきすぎる」が、福島に住んでいる人が詠んでいる場合は「本当にそうですよ」と思える正木の評価は、永瀬の句の詠み方が「福島で被災をした人の句と信じ」られるからだとするが、選評会で永瀬の句を評価することには消極的であつた小澤賞が「(た)んぽぽや槌音は鎮魂の音」の(槌音は鎮魂の音)は既成の言葉のように感じられる。その土地にいて嘆いているのではなくて、外から詠んでいるような気もしてしまう」と述べるように、句がどこで詠まれたかは読み手の主観によつて判断されるものであり、それは「信じる」しかないものである。

確かに永瀬の〈激震や水仙に飛ぶ屋根瓦〉、〈戻らない子猫よ放射線降る夜〉などの、激しい揺れにより水仙に屋根瓦が飛ぶ様子や、放射線が降り注いでいるにもかかわらず子猫が戻らない様子を詠んだ句は、被災後の福島で起こっていることを、その場「で」詠

んだものと読むことも可能だろう。しかし先に小澤が挙げた（たんぼぼや）句以外にも（陥没も地割れも花菜道となる）、（さへづりやあの日とよべるのはいつ）などの、陥没や地割れが花菜道となる未来や「あの日」と呼べる未来を思う句は「現在」の福島の様子を詠んだ句ではないため、福島を離れ詠んだ句とも読め、（しやぼん玉見えぬ恐怖を子に残すな）のような放射線の恐怖を子供に未来に残すなという思いは福島以外でも共通して抱かれる感情である。

さらに酷評に晒された長谷川權の『震災句集』にも、句だけを讀んだときに詠み手が「どこで」詠んだ句であるかを判断することが困難な句がある。たとえば（放射能浴びつつ蕃薇の芽は動く）、（汚染水春の愁ひの八千噸）、などは句だけを讀んだときには、原発事故後の福島の春の様子を詠んだ句とも読め、（悲しんでばかりもをれず齋打つ）、（湯豆腐や瓦礫の中を道とほる）などの句は被災地での生活を詠んだ句のようにも読める。確かに先にみたように長谷川の句には被災地と被災者に「無関心」な様子を露にするものもあったが、福島や被災地での生活を詠んだように読める句も詠んでおり、そのような句を仮に作者名を伏せ永瀬の句と混ぜて讀んだとすれば、どちらがどの句を詠んだかを判別することは困難であろう。神野紗希は、詠み手が自分の立ち位置を定め、震災を詠むことを望ましい態度と指摘していたが、自身がどのような詠み手であるかの「情報」がパラテキストとして機能し、句の解釈を定めてしまう状況においては⁽²⁴⁾、詠み手自身が立ち位置を自ら定めて詠むというよりは、詠み手の立場が震災の詠み方を制限するように機能していると述べる方が適切であろう。そしてその傾向が、長谷川

權が酷評されていた震災直後には特に強く機能したといえるだろう。

五、東日本大震災にとつての季語と御中虫の戦略

では詠んだ句のみならず、被災者であったかどうか、被災地と縁を持つ人物であったのかどうかなど、詠み手の情報までを含み、震災詠への評価が下される状況で、被災者ではない御中虫は、被災の影響を受けていないとみなされる場所で、どのように震災を詠みえたのであろうか。

御中虫（おなかむし）は、一九七九年大阪出身で、京都市立芸術大学美術学部中退。二〇一〇年第三回芝不器用男俳句新人賞を受賞し、平成・万葉千人一首俳句の部でグランプリを受賞。また二〇一一年に刊行した句集『おまへの倫理崩すためなら何度でも車椅子奪ふぜ』（愛媛県文化振興財団）で第二回北斗賞に佳作入選し、今回問題にする御中虫自身の方法で東日本大震災と向き合った『関揺れる』を二〇一二年三月に刊行している⁽²⁵⁾。御中虫は、『関揺れる』での震災への向き合い方について以下のように説明している。

【関揺れる】／これが 虫の 震災125句の 季語となつて
ゐます。／なぜか。／虫は／被災者ではありません。／虫の
近しいひとたちもほぼ全員被災者ではありません。（中略）虫
は我が身のこととして 東日本大震災を ひきうけられはしな
い人格の持ち主である。／た／だ／し／関悦史さんという被災
者がゐた。（中略）関さんが被災者であるということは虫に

とつては大事件であり、しかもいまだに関さんのある地方がしばしば(けふも)揺れてゐる、ということ、関さんの「揺れた」といふわづか三文字のツイートにもころが動揺すること、これは、紛れもない事実なのです。／云わば虫は関悦史の「揺れツイート」を通じてのみ、この震災に向き合つてゐる。／それ以外は、ない。／なので、「関揺れる」といふ【東日本震災忌】に代替する季語を自分でつくる必要があります。(26)

御中虫にとつての東日本大震災は、友人である関悦史が「揺れてゐる」以上のもではなく、そのために東日本大震災を忌む季語では句を詠めず、御中虫にとつての震災そのものであつた関が揺れているという事実を踏まえ、【関揺れる】という代替季語を創出する必要があると説明されている。そこで当然の疑問となるのは、関が揺れているという事実を今回の震災のすべてとみなすとき、なぜ【関揺れる】という代替季語なしでは句作ができなかつたのかということである。

そもそも東日本大震災を詠むにあたり、季語はどのように捉えられていたのだろうか。熊本地震を体験した岩岡中正は、東日本大震災の悲惨も踏まえたくて、以下のように述べている。

大地震のような天変地異、つまり己のいのちにまで迫るような危機の折には急浮上し意識されるものとなる。というのは、その際、季語世界のようなかつての予定調和的世界が崩れるからである。(中略)「季語」はただの季節のことではない。季語はこの世に「存在」するものがそこにあるべくして在るための

「存在の絆」なのだが、この季語の存在世界の崩壊が今、随所で起こりつつある。私たちの季語は、たんに季節のことばであるだけでなく、私のいのちを歴史と風土と社会の不可欠の要素として自己確認する力をもつたことばである。(27)

岩岡は、安定した世界の存在を示すことばである「季語」が震災によつて崩壊したと指摘するが、そのような認識は、被災し震災を詠んだ俳人には共通する認識であるようにみえる。たとえば、岩手県釜石市で被災した照井翠は以下のように述べている。

伝統的な季語が、一句の世界を支え得るなら委ねもするが、特にも荒涼とした虚無的な世界を詠む際には、季語が一句を支えきれないことがある。ましてや、この度の大震災は、みちのくにあつては、木々が芽吹き、梅が蕾み、雪解水がごうごうと音をたてていた三月上旬のことであつた。春の始まりという、生命力溢れるその勢いと方向性をすたすたに引き裂くような天災であつた。このような事情から、俳句表現の選択肢として無季があつたことはむしろ自然なことだつたと言える。(28)

同様に、出先から長時間歩いて帰宅すると、自宅近くまで津波が迫つていた経験をした高野ムツオも「季節のサイクルを超えた現実世界が目前に出現したときには、季語を使わない方がそのときの気持ちをよく表現できるということ」を、今回の震災で自分の体験としてよく理解できた⁽²⁹⁾と述べており、照井と高野は、東日本大震災を季節のサイクルの外側から到来し、生命力溢れる春を破壊

したものと捉え、春の季語を用いて震災を詠むことへの抵抗を示したといえるだろう。³⁰⁾

照井や高野は、季語が示す自然を震災が破壊したために、それを用いることなく無季で詠むという試みを行ったが³¹⁾、御中虫も同様に伝統的な季語を用いることで、句が否応なく四季のサイクルの中に位置づけられてしまうことへ抵抗するために、「関揺れる」という季語を創出したのではないだろうか。御中虫が震災句を詠んでいる際にも「いまだに関さんのある地方」は「揺れてゐ」たのであり、「関はいつも一人で揺れてゐた、いつも」という句が示すように、関は季節の巡りとは関係なく「いつも」揺れてゐたのである。

しかしでは、なぜ無季ではなく【関揺れる】という季語を創出する必要があったのだろうか。それを考えるために、無季俳句から句作を開始した関悦史の季語についての発言を参照したい。関は、以下のように述べている。

季語は、句の中においては、「作者が言いたいこと」には取り込まれきらない、やや別の位相を占めることが多い。この一種の異物性がまったくなくなってしまうと、季語はその効力を失う³²⁾

季語は「作者が言いたいこと」には取り込まれきれない「異物性」を有すると関は指摘する。照井・高野は被災者であり、震災という異物に破壊された後の風景のなかに自らもいたため、その風景を四季のサイクルの外側にあるものとする見方を構築し、無季で詠むという試みをなしたが、そこから遠く離れ、関が揺れている場所か

らも隔てられている御中虫にとつては、関が揺れるという事態が自らの「日常」には収まりきらない「異質な」出来事としてあつたはずである。そもそも「関揺れる不条理不可避なものとして」という句が示すように関が揺れること、それ自体が不条理な事件であり、「歳時記を捲る関すら揺れにけり」、〈揺れながら物食ひ寝ながら揺れる関〉などの句からは、歳時記を捲り、物を食ひ寝る「日常」の生活を送っていた関が「揺れる」ことで、地震が関の「日常」の中に入り込んできた様子がかがわれ、「関揺れる」という季語には震災の不条理さと、地震の揺れが加わり変容してしまった関の異質な「日常」が宿っている。そして【関揺れる】が疑似季語として用いられることで、私の「日常」にも異質な要素がもたらされることになる。〈関揺れる私は煙草吸つてゐる〉、〈関揺れる一方我は居眠りす〉などの句は、関が揺れていることを意識しながらも、震災以前と変わらない「日常」の生活を送る「私」が関と対比的に捉えられ、〈関揺れてゐることを思へば何のこれしき〉、〈暖房を消して関氏の揺れ思ふ〉などの句は関が揺れていることをより強く意識し、それを励みに「日常」生活を送る「私」の姿や、せめて暖房は消して関のことを思う「私」の姿が詠まれ、関が揺れているという事実が「私の日常」生活に影響を与えていることが読める。そして、〈本日はお日柄もよく関揺れる〉ではお日柄のよい「私の日常」に、関が揺れる「日常」が付随し、読み手の「私」の「日常」とは異なる「日常」がお日柄のよい、この瞬間にも存在することを示している。つまり『関揺れる』は、読み手の「私」が震災以前から変わらない「日常」の生活を送るなかでも、被災した知人の『日常』が、「私の日常」に変化を与えた様子を詠み、「私」がいつもの「日

常」を送つていても、関はその時点でも揺れていることを同時に示すことで、震災以前から何も変わっていないようにみえても、変化した『日常』が同じ時間にあることを詠んだ句集だといえるだろう。御中虫自体は被災をしておらず、「日常」も変化していないが、関の『日常』が変化したことを受け、変化していない自分の「日常」に、関の変化後の『日常』を添加することで、被災地に住む被災者でなくても、震災後には意識の変化があったこと、そして震災以前からの「日常」が引きつづいているようにみえても、それは「私の日常」の範囲にすぎないことを「関揺れる」は示している。震災直後に上記の内容を達成した句集として『関揺れる』を高く評価することができるだろう。

六、終わりに

本稿では、震災詠においては詠み手が被災者であるか否か、被災地と関係のある人物か否かの「情報」が、パラテキストとして句の評価に関係することを指摘した後に、被災者ではなく被災地とも縁がない御中虫が「関揺れる」という季語を創出することで、震災後の変化した『日常』へと連なっていく震災詠のあり方をなしていったことを明らかにした。そのような御中虫の震災詠のあり方は、堀本吟に『御中虫』は『関悦史』との関わりの中でのみ極私的にこの季語を作つて、『季語』は関個人に対する虫個人のお見舞いや激励のために使われる。(中略)関&虫のこの対応関係や同情心の動き方は、戦後と現在とを連続的には考えていない。個個別別の壺のうちに入り込んで新しい世代のつながり方、自己普遍化の

方法である」⁽³³⁾と評価され、西岡伊吹にも、御中虫が「『自分につての震災とは何か』という問いを突き詰めたこと」を評価したうえで、「彼女は、「関揺れる」という「季語」のみを用いて125句を編み上げた。／震災という共通の経験を、自分自身のものとして捉え直すことは、本来、これほどに個別的で、かつオリジナルな行為になるはずなのだろう。被災した／しない、被災地に行った／行かないといった分け方で震災の詠み方を区別しよう(させよう)とする一部のムードに対して、一線を画する態度であると思つた」⁽³⁴⁾と好意的に受け止められた。

ただし、そのような好意的な読み方に対し、否定的な意見もある。俳句同人誌「群青」「オルガン」に参加している福田若之は、御中虫の「揺れたら関なの?」「じゃあ私も関」「じゃあ俺も」の句にも触れ、『私や俺が揺れば関である』という発想は「かけがえのなさの把握が決定的に失われて」おり、それを見えにくくする震災という状況のなかで「かけがえのなさを『どう書いていくか』が課題」⁽³⁵⁾なのではないかと述べている。しかし、この句は関の揺れを「わが身のこととして」引き受けようとした産物なのではないだろうか。実際には「関の揺れ共有できず春の月」とも詠まれるように、揺れを共有することはできないが、むしろそれゆえに「揺れたら」関と同じものを共有できるという感情が明瞭になり、関が揺れていることと真摯に向き合う詠み手の姿が浮かびあがる。「揺れば関である」という発想は、現実には詠み手が関と同じように「揺れる」ことはないのだから、かけがえのなさを見えなくさせるということではなく、他人事として震災を詠むことが憚られる状況の中で、自らのこととして震災を捉えるためのひとつの方法として

「揺れたら」という仮定があり、それが御中虫の真摯さであったと捉えるべきではないだろうか。

もちろん『関揺れる』のような揺れている関につながっていくような詠み方は、関が揺れている震災「直後」にのみ可能であった表現ではある。しかし未だに「被災地」と呼ばれ続けなければならない地域で生活したり、その地域に縁を持っていたりする俳人もいる以上、御中虫の詠み方は今後の震災詠に示唆を与えるものでもあるだろう。俳句において東日本大震災は、震災直後に詠み終わったわけではなく、詠みうる余地を十分に残し⁽³⁶⁾、その研究もまた途上にある。被災者の震災詠とともに、震災直後以後の震災詠のあり方を研究していく必要もあるが、その点は今後の課題としたい。

注

- 1 西村和子・対馬康子・小川軽舟「合評鼎談 総集編 今年の秀句、そして諸問題」『俳句』二〇一二年一月
- 2 野崎海芋「震災と俳句と私」『澤』一四八号、二〇一二年七月
- 3 權未知子「現代俳句時評(2) あなたはどこにいましたか(1)」『俳句』二〇一二年二月
- 4 浜松黛月ほか「今、東北で俳句を詠むということ」『むじな』二〇一七年一月
- 5 高橋修宏「空無の強度——高橋睦郎の震災詠をめぐって」『俳誌五七五』二号、二〇一九年一月
- 6 宮坂静生・長谷川權・対馬康子「鼎談『平成』と俳句」『俳句αあるふあ』二〇一八年秋
- 7 小野裕三「バーチャルでクールな俳句」『豈』五七号、二〇一五年

四月

- 8 高野ムツオ・和合亮一・佐藤通雅「俳句」創刊60周年記念シンポジウム 大震災と詩歌」『俳句』二〇一二年一月
- 9 安西篤「リアルに体感できるかどうか」『俳句界』二〇一二年七月注4に同じ
- 10 神野紗希「現代俳句時評(3) 震災以後の俳句 真実を求める想像力」『俳句』二〇一九年三月
- 12 著者の情報は『震災歌集 震災句集』(青磁社、二〇一七年三月)の「著者略歴」による。
- 13 『震災歌集』、『震災句集』は二〇一七年三月に青磁社より合本され、『震災句集』以後の震災関連の句も収録し、『震災歌集 震災句集』として刊行された。なお本稿の長谷川の句の引用も、青磁社の合本版から行う。
- 14 関悦史「ヴァーチャルな純粹——長谷川權について」『豈』五四号、二〇一三年一月
- 15 関悦史「終わりが始まった国で」『俳句αあるふあ』二〇一八年秋
- 16 堀本吟「戦争と震災・国家とワタクシ——角川春樹、関悦史、御中虫——」『豈』五三三号、二〇一二年六月
- 17 權未知子「現代俳句時評(3) あなたはどこにいましたか(2)」『俳句』二〇一二年二月
- 18 川村杳平「東日本大震災・句詩詩アーカイブス序説(2)」『北の文学』六八号、二〇一四年五月
- 19 国立音楽大学の教員であった荒川有史も『震災句集』収録の句を読み解きながら、好意的に評価している(荒川有史「短歌と俳句の間——長谷川權『震災句集』を読んで」『文学と教育』二〇一二巻二一六号、

二〇一二年)。

20 永瀬十悟の「ふくしま」五〇句にも(大なるの後の春泥生臭し)という句があるが、角川俳句賞の選評において小澤實が「津波の後のにおいは繰り返して報道されたところだ。それを果たして(春泥)と言っているのか」と疑問を呈している(池田澄子・正木ゆう子・長谷川權・小澤實「時を経て残る震災詠」『俳句』二〇一一年一月)。

21 関悦史「現代俳句時評(4)震災後から戦前(?)へ」『俳句』、二〇一五年四月

22 永瀬十悟(ながせとう) 一九五三年、福島県須賀川市生まれ、現在も須賀川市に在住。俳句同人誌「桔槔」同人。二〇〇三年「第五回福島県文学賞正賞」受賞、二〇一一年「ふくしま」五〇句で「第五七回角川俳句賞」受賞。句集に「ふくしま」五〇句を含んだ『橋籠——福島記』(二〇一三年、コールサク社)、『三日月湖』(二〇一八年、コールサク社)がある。なお著者略歴ならびに本稿での「ふくしま」五〇句の引用は『橋籠——福島記』による。

23 池田澄子・正木ゆう子・長谷川權・小澤實「時を経て残る震災詠」『俳句』二〇一一年一月

24 俳誌『むじな』の創刊者のひとりである浅川芳直も、震災詠として有名な高野ムツオの(車にも仰臥という死)、(泥かぶるたびに角組み光る蘆)、(瓦礫みな人間のもの犬ふぐり)などの句にふれ、「東日本大震災の句として鑑賞しなくても成立する句ですよ。環境破壊や戦争を思い浮かべてもいいと思うんです。ただ、高野ムツオ、二〇一一年という情報があつて、読者としては震災の句として打たれるものがある」(浅川芳直ほか「震災詠を振り返る」『むじな』三号、二〇一九年一月)と述べており、句のみならず「高野ムツオ」という俳人の情報

やそれがいつ詠まれた句なのかという情報が組み合わさることで、震災詠の鑑賞が成立していることが、浅川の発言からもわかる。

25 著者の情報は『関揺れる』(巴書林、二〇一二年三月)の著者略歴による。

26 御中虫「関揺れる」巴書林、二〇一二年三月、七七—八〇頁

27 岩岡中正「体験的季語考——季語世界にどう関わるか」『俳句αあるふあ』二〇一九年冬号

28 照井翠「三・一一俳句の可能性」『澤』一四八号、二〇一二年七月

29 高野ムツオ「無季から有季、有季から無季」『季論21』四四号、二〇一九年四月

30 ほかにも小川軽舟が「今回、地震直後の句でたくさん見たのが「春の地震(ない)」です。それで季語が入っているというのは、どうなんでしょう」「それを見るにつけても『季語って何だろう』ということを思いましたね」(合評鼎談 総集編 今年の秀句、そして諸問題、注1に同じ)と述べ、山崎十生が(春の地震などと気取るな原発忌)(山崎十生「原発忌」破殻出版、二〇一三年一月)という句を詠んでいるなど、東日本大震災を「なみ」と表現することあわせ、それを春の季語と取り合わせて詠むことは是非が問われている。なお永瀬十悟「ふくしま」五〇句でも「なみ」の表現が用いられており、角川俳句賞の選評では(打ち続くなみのハンマー砂あらし)などの句に対し、池田澄子が「『地震』を(なみ)なんて言ってる暇はないだろう、「地震」でしょう、と言いたくなるんです」とし、小澤實も「なみのハンマー」は気になりましたね」と述べている。

31 無季で詠むという試みは、たとえば高柳克弘の句(瓦礫の石抛る瓦

磯に当たるのみ」に対して小澤實が「有季の句に慣れているので、無季というだけでギョツとします。でも、その感じがまさに地震の時の震動と響き合うものがあるのです。ですから、いちがいに無季だからだめだとは否定できない。季語は日常を捉えるべきもの、震災という異常事態には無季で向き合うしかないのか^マしれません。難しい問題ですが。(中略)地震を詠む、津波を詠むことを突き詰めていけば、それは季語に代わるものになる可能性がある」(小澤實・高野ムツオ「自然とどう向き合うか」『俳句』二〇一二年三月)と述べ、無季詠の可能性を示唆しているように、震災詠を考察するうえで今後問うべき課題のひとつといえる。

32 関悦史「無季から作りはじめて」『俳句αあるふあ』二〇一九年冬

33 注16に同じ

34 西丘伊吹「『おれは——確定申告もあるし』『震災詠』について思うこと」『週刊俳句』二五五号、二〇一二年三月、<http://weekly-haiku.blog.spc.com/2012/03/60.html>、二〇一二年十月十日参照

35 福田若之ほか「座談会『震災と俳句』』『オルガン』四号、二〇一六年二月

36 たとえば鶴田智哉『風と円柱』(ふらんす堂、二〇一四年九月)は、震災の「痕跡」を詠み、出来事をめぐる「以前／以後」の枠組み自体を捉え返すような試みを俳句によって行っている。

付記

本稿は、第六一回原爆文学研究会(二〇二〇年八月八日)におけるワークショップ「(震災)と俳句」での発表を基に、加筆修正を施したも

のである。発表後様々な意見を頂き、本論に反映させていただいたが、特に本誌収録の中原豊さんのコメントと、柳瀬善治さんの「私」性と詩歌に関するコメント(と後日いただいたメール)からは深い示唆をいただいた。末尾ながら深く感謝申し上げます。